

1. 活動内容

I. 生徒会による「新入生歓迎会」

平成 25 年度の教育活動のスタートにあたり、4 月 11 日、昨年度からの ESD 計画に沿い、生徒会活動としての新入生歓迎会で、生徒会長がパワーポイントで本校の ESD について新入生に説明した。「どんな街に暮らしたいですか？」という質問について、目指す街のビジョンについて考えたのち、それでは「どんな学校で暮らしたいですか？」と新入生徒自身の学校生活について考える場面を設けた。このことを通して、これからの本校での生徒会活動において、自分たちが描く学校像を ESD の目指すところと重ね、その意識を高めることができた。



この新入生歓迎会は、生徒会が主催し、生徒の主体的な活動を意図したものである。歓迎会の後半には、「ユネスコ」について、また、本校が「ユネスコスクール」として認定された所以を生徒代表は分かりやすく説明した。

「広く世界と地域に学び、できることからはじめよう。」にしめくくられるように、入学間もない生徒への、上級生の歓迎の意と共に、本校の生徒会がどのような価値観をもって活動しているかを端的に説明するよい機会となった。

II. 植生保護のためのシカ柵の設置とその後の観察

本校は、森林の植生保護のため、平成 23 年 10 月、当時の 3 年生が天城山系の「つげ峠」にシカの侵入を防護する柵を設置した。その後の植生の観察を目的に、平成 24 年度の 4 月には職員と保護者、「天城自然ガイドクラブ」「環境カウンセラー」「伊豆森林管理署」の方々の指導のもとにこの「つげ峠」に登



っている。この第 1 回目の観察では、春ということもあって柵の内外での植生の差異は顕著には見られず、柵内の植物の若干の種類について確認することに留まった。

本校教職員、保護者、地域の方との協働によるこの取組は、環境保全に向けての行動の具体的なモデルとなるものと考えている。

平成 25 年度は、つげ峠での植生観察の計画をあらためて見直し、職員と生徒の代表、および前述の指導員、ガイドクラブの方々と共に、7 月末に実施する計画を立てた。

7 月 24 日（水）生徒会代表（役員）の 6 名、指導員と教職員の合わせ 23 名でシカ防護柵を設置してあるつげ峠の途中までバスで行き、そ

の後に現場まで徒歩で登頂した。夏季ということで、一帯の植物の繁殖は著しく、柵内外の状況の差異は歴然と認められた。植生の分析をし、生育の衰退が懸念されるブナなどの種について、今後の継続観察のためにタグを付けたり、密集度の測定をしたりして記録に留めた。

シカ柵設置後の調査において課題となるのは、今後どのように継続して観察を続けるかという点である。全校生徒の活動として、教育計画に位置づけるには現状では困難がある。生徒会の環境保護活動の一つとして、希望者や代表生徒により今後も夏季休業に実施していくことを考えている。

Ⅲ. 全校生徒によるゴーヤの植栽活動

現在の2年生が1年生の時に種を蒔き、温室で発芽を促していたゴーヤの双葉が揃ったので4月30日（火）、3年生が技術科の授業時間にプランタに植え替えをした。生徒会でのESDについての活動の説明もあり、3年生はゴーヤの植え替えに一生懸命に取り組んだ。このことは、技術科の栽培領域の実習内容ともなり、ゴーヤはその意味でよい教材ともなった。

全ての学級の前のベランダ側に、5月の連休中に製作していた、「みどりのカーテン」用の網の設置が完了した。この先学年委員会が中心となり、その栽培育成を手がけていくことになった。施肥、水やり等を手がけ、6月には、豊かに葉の茂るグリーンカーテンとなっていた。

Ⅳ. 世界一大きな授業（道徳）の実施

5月1日（水）

「世界一大きな授業」を実施した。新任2年目の教諭は、4択問題等の内容の導入によってその後の展開がやりやすかったと授業を振り返った。

Ⅴ. 各学年の体験学習と「天城学習発表会」に向けて

5月を迎えると各学年、それぞれの体験学習に向けての準備を行う。すなわち、1年生の「福祉体験学習」2年生の「自然体験学習」3年生の「修学旅行」である。5月のこの学習と10月の1年生「自然体験学習」2年生「職場体験学習」3年生「地域学習」は、教育課程として、ESDの視点で連鎖しており、1月の「総合的な学習の時間（天城学習）」の発表会でそれぞれの学年の学習をまとめ発表することになる。

これら活動内容とともに、1月18日（土）「天城学習発表会」での各学年の発表内容をまとめたものを以下に報告する。

Ⅵ. 天城学習発表会

（1）1年生の発表内容

本校の総合的な学習は、「持続可能な社会の担い手を育てる」ことを目的にしている。

そこで、1年では、まずは自分たちの住む地域について知ることを目的に、学習に取り組んだ。目標を設定する際には特に①と②に配慮した。

- ① 地域での直接体験の重視
- ② 地域の人とのつながりの重視

この目的に沿って、総合的な学習の時間を中心に、5月と10月の2回に分けて、1年部では体験学習の計画を立案した。

福祉体験学習（5月）

近隣の6つの施設に10人ずつが行き、高齢化が進むこの地域の高齢者から様々なことを学んだが、その中で、特に介護の仕方や大変さ、大切さを学んだ。また、お年寄りから昔話・戦争体験の話などを聞いたりして、直接、間接に多くを学ぶことができた。

それぞれの福祉施設では、中学生を温かく迎えていただいたが、施設での詳しい活動内容を1月の全校生徒、行政関係者、地域の方々、保護者を招いての「天城学習発表会」で発表した。

単なる体験発表にとどまらず、今後の地域社会の活性化に向けての問題意識の高まりを大切にしたい。具体例を挙げると、高齢者の割合が33%に達する伊豆市の現状において、いかに福祉を充実させるか、また地域における労働人口世代の空洞化の中で、いかにそのことを抑止したらよいかの問題意識を持つことを大切にしたい。この問題意識が、以後、持続可能な社会の担い手としての原点となると考えるからである。



自然体験学習（10月）

毎年10月にはふるさと天城の自然の中での1泊2日の体験学習が教育課程として定着している。本校の環境保全をテーマとするESD活動の伝統ともなっている体験学習である。



今年の自然体験学習も内容の濃いものとなった。地域に住む、多くの方々に本当にお世話になった。なお、1年生は今年もジオパークについて学習を深めた。次に生徒の感想発表を紹介したい。

「・・・私は、自然体験学習でたくさんのことを学びました。ネイチャーゲームでは、大地に・宇宙に思いを抱くことができました。ありがとうございました。食事は地域の持続可能な発展のために伊豆市で取り組んでいる「鹿肉の加工」。食事はその鹿肉を夕食のカレーの具材として使いました。また、地域活性化のために開発されたラブバーガーは2日目のお昼に食べました。パン生地は天城で作られた米粉、塩は

戸田の塩、肉は鹿肉・・・、大変おいしくいただきました。」等、生徒、担当教師の感想を見るとこのように好評でした。

また、今盛んに叫ばれている伊豆ジオパーク。「ジオパーク」とはどんなものかをジオパーク推進委員会の鈴木先生に来校して講話をいただいた後、現地に出向き、伊豆の大地の生成の神秘性や偉大さに触れた。自然な地形も長い時間を経て形成されてきている。人間の利便性を優先してむやみに開発していくと、取り返しのつかないことになることも学んだ。

(2) 2年生の発表内容

自然体験学習

2年生の天城学習は、自然体験学習と職場体験学習を行った。二つの活動は、持続可能な社会の実現を目指して、天城の課題を見つけるための活動である。

自然体験学習を行う前に、2時間事前学習を行った。1時間は、天城自然ガイド倶楽部の浅田さんに「葉っぱによる樹木の見分け方」についてお話をしていただいた。もう1時間は、環境カウンセラーの塩谷さんに「天城の森の現状」についてお話ししていただいた。

2年生の「自然体験学習」の目標は、以下の3点である。

- ① 天城の森の現状を自分の目で確かめる。
- ② ネイチャーゲームによって自然と触れ合う。
- ③ 天城を食する。

5月20日は、万二郎・万三郎に登り、天城の森の現状を自分の目で確かめる予定だったが、雨のため、午前中は、学校で天城自然ガイドクラブの栗田さん、富永さん、清野さん、杉本さんに4つのブースを作ってもらい、天城山について様々な視点からのお話をしていただいた

1日目の朝が雨だったため、計画していた万三郎岳(14,05m)へのハイキングは中止されたが、「天城自然ガイドクラブ」の方々に体育館で事前学習よりもさらに詳しい講話をしていただいた。午後には雨も止み、キャンプ場周辺を散策した。目の前にある植物の説明をしていただき、生徒は植物に触れてみたり、臭いを嗅いでみたり、五感を働かせて観察を行った。樹皮がはがされている、鹿が食さない馬酔木(アセビ)が群生をつくっているなど、鹿の食害による影響の大きさも現地で確認した。夜には「伊豆子どもミュージアム」の方々にネイチャーゲームのインストラクターをしていただいた。薄暗い森の中や灯りのない広場での活動となったが、普段ではできない自然体験の内容であった。2日目も「天城子どもネットワーク」の方々と朝食前に、森の中で聞こえてくる音を絵に描いてみたり、落ち葉集めをしたりした。



多くの生徒は、自然の奥深さ、美しさ、楽しさ、大切さなどの価値と、鹿の食害などの人間がもたらした影響を、今回の体験をとおして感じる事ができた。

「天城を食する」という目的では、地元の食材を使った鹿肉・猪肉の入ったカレーを食べたが、このカレー作りは保護者の協力をもいただいた。

職場体験学習

10月に2年生は職場体験学習を行った。以下の4つの目標を立て、天城地区の17事業所で体験させていただいた。

- ① 天城の地に根ざした仕事に対する理解を深める
- ② 持続可能な地域にするための工夫や手だてを知る
- ③ 望ましい勤労観、職業観を身につける
- ④ 社会のルールやマナーを体得する。

職場体験学習を行う前に、地元の旅館、船原館さんの鈴木さん、若木屋さんの小島さんに職業についてのお話をさせていただき、体験への目的意識を高めることができた。今年は、山葵農家2軒、椎茸農家2軒を含む17事業所で体験させていただいた。どれも地域のよさを生かした仕事であり、体験を通して天城



のよさを別の角度から知るとともに、仕事して生きていくための苦勞、顧客のためのおもてなしの心などを認識した。

この自然体験学習や職場体験学習をとおして、持続可能な社会の実現につながる自分のテーマをしぼり、3年生になったときの修学旅行や地域学習で学習を更に広げていく。

(3) 3年生の発表内容

京都・奈良にてがかりを学ぶ修学旅行

本年度の修学旅行のスローガンは「古都京都から学ぶ天城の未来」である。3年生は5月17日(金)から2泊3日の京都方面への修学旅行を行った。1日目は自分のテーマのもとに、施設、名所旧跡、官公庁等を訪れ、ふるさと天城の自然、経済、文化の持続発展のためには、どのような方策があるかという課題についてのヒントを探した。

2日目は奈良を訪問し、奈良公園内の鹿苑で鹿にかかわる講話を聞いたが、天城にもたくさんの鹿が生息していて、樹木の鹿による食害が深刻化している。奈良ではその鹿との共生をどのようにしているのか。同じ日本に、地球に生きる動物として共生の道を模索していくことはとても大切であると同時に、たいへん困難でもあることが問題意識として芽生えたものと感じている。

奈良から帰ると夕食前に宿泊ホテルである「ホテル サンルート京都」の職員の方によるエコ講話を聞いた。夕食会場において、担当者から同ホテルの環境への配慮、省エネ対策の具体を例示していただき企業経営における環境への配慮の実際を学ぶことができた。京都の環境保持のために企業として様々な工夫、努力をしていることが分かった。ホテルに連泊し、ルームメイクをお断りすることにより、29480円もの節約をすることができたという金額としての数値は、生徒に実感として受け止められたものと思う。



「これはお金の出費を抑えることができたというのではなく、CO2 排出を削減できたというところに意義があります。」

このような意義ある修学旅行を終え、各事業所からうかがったことを比較検討材料にして、天城の活性化に生かすために、天城のことについて更に詳しく知る必要感を生徒は抱いたものと思える。

地域学習



「修学旅行を通して、何もしなくても古い町並み歴史ある神社仏閣に惹かれ人が集まってくるのではなく、京都では日本人はもとより外国人の方々も来たくくなるような様々なおもてなしを、工夫を、そして努力をしていることが分かった。」

この生徒の課題意識をもとに10月9日、10日、11日の3日間をかけて、天城周辺地区の事業所を訪問し、生徒は実態調査を行った。

テーマ「天城の現状を知る。」そのために、

- ① 伊豆市役所 土地対策課 ②伊豆市役所 農林水産課
- ③ 伊豆市役所 観光交流課 ④伊豆市観光協会天城支所
- ④ 旅館「落合楼村上」 ⑥ 旅館「船原館」 ⑦旅館「たつた旅館」

など24の事業所を訪問し、3年生はこれまでの学習を、ふるさと天城の活性化のための提言としてまとめ、「天城学習発表会」で発表した。生徒の提言を以下に2つ示す。

提言1「おもてなし精神No.1の地域へ～観光客であふれる地域にするために～」(要旨)

天城は豊かな自然に恵まれ、温泉が豊富で、わさびや椎茸等の特産品もたくさんあります。京都にあって天城にないもの、それは「観光客に対する市民レベルのおもてなしの精神」です。来てくれたことへの感謝の思いと笑顔で接する、京都ではどこでもそうしてくれます。京都に観光客が絶えないのは、歴史

的建造物があるからだけでなく、誰からも訪れた人がもう一度来たくなるような“おもてなし”を受けるからではないでしょうか。市民全体で天城にいらっしやる観光客に笑顔と感謝のおもてなしの心で接すれば、もう一度来てみたいと思うようになるでしょう。

天城を日本でおもてなしNo. 1の地域にしたいと私は考えます。

提言2「天城の自然、特産品を生かし、より多くの観光客が集まる場所」(要旨)

京野菜というブランドがあります。もともとは全国的に知れた野菜ではなかったそうですが、京野菜のよさを東京など他地域でのイベント等で売り込んで今のブランドを築いたそうです。天城にも、“わさび”、“椎茸”、“米”、“イズシカ”などの特産品がありますが、京野菜ほどには知られていません。もっといろいろな場面でのアピールが必要です。さらに、豊かな天城の自然を生かして、



天城の林道でサイクリングするようなアウトドアアクティビティを企画して売り込んではどうでしょうか。所々舗装したり空気ポンプを置いたりするのもよいと思います。観光客は非日常体験をしにきます。この豊かな自然を生かしていくことが大切だと思います。

しかも、このような取り組みについて天城だけで考えていくのではなく、伊豆市＋伊豆半島で連携して考えていくことが、天城の活性化には欠かせないと思います。



今ないものをつくるのではなく、特産品や豊かな自然や温泉など、天城や伊豆に今あるものをもっともっと磨いていきましょう。

VII. まとめ

生徒の自尊感情は、学校教育目標「夢を持ち、たくましく生きる生徒」の核になるものと考えている。この自尊感情を育むために、地域の方々との交流の中で、地域の方々から学び、地域の良さを知り、地域の自然環境、産業分野等の持続発展のために行動する生徒の学習活動を教育課程実施の中で実践してきた。今後の課題は、「総合的な学習の時間」だけでなく、授業におけるESDの視点を大切にした授業実践にまで広げ、教育課程全体をとおり教育目標の実現に迫りたいと考えている。
